

定住・農耕モンゴル人に関する文化人類学的研究 内モンゴル自治区東部地域における生業転換と 社会変容

著者	包 双月
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第612号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133412

定住・農耕モンゴル人に関する文化人類学的研究
—内モンゴル自治区東部地域における生業転換と社会変容—

包双月（ボウ サラ）

本研究の目的は、内モンゴル自治区東部地域（以下、東部地域）において定住、農耕化したモンゴル人を対象として、漢人による入植を受けてその社会にいかなる変化が生じるのかを、定住・農耕化、生業構成の変化、日常実践と儀礼に関する記述を通じて人類学的に論じようとするものである。東部地域では、清朝中頃に当たる18世紀初頃から漢人農耕民が入植し始めた。さらに中国共産党政権の成立以後には、軍事と経済開発を目的とする漢人移住政策が採られた。これら漢人の移住によって、モンゴル人の生活世界は大きく変容した。本研究では、先行文献と筆者が同地域で得た新たな資料をもとに、東部地域社会の変容の実態を明らかにしたうえで、遊牧生活との連続性を意識しつつ、定住・農耕化によって何が変化した、何が持続しているのかを明らかにしてゆく。

モンゴル人は一般的に遊牧民、騎馬民族として知られている。人類学的モンゴル研究は膨大に蓄積されてきたが、その関心のテーマは牧畜に偏ったことも事実である。一方で東部地域における農耕化したモンゴル人は「漢化」として捉えられることが多い。とりわけ農業とともにブタを生活に導入したことで彼らは「モンゴル人らしくない」と言及されてきた。筆者はモンゴル人のブタの飼育と利用の実態を漢人と比較分析を実施した。その結果、ブタの飼育方法と解体方法に関してモンゴル人と漢人は大差がなかった。しかし、ブタ肉の切り分け方、民俗分類や名称に関しては「伝統」家畜のウシやヒツジからそのまま当てはめたものが多い点が確認された。東部地域のモンゴル人は遊牧文化をベースとしたブタ利用の実践を確立したことを明らかにした。

家畜ブタを導入する前提条件になったのは農耕化である。そして筆者はモンゴル人の農業化について検討した。モンゴル人は遊牧民として語られてきたが、その生産活動は牧畜だけではなく、狩猟、農業、漁業など補助的な生産活動もあった。本論では、「ナマク・タリヤ」と呼ばれるモンゴル人の伝統農業を取り上げた。それは遊牧の片手間で実施していた自然農法であり、日本や中国の農耕民の農業と大きく異なることを指摘した。漢人の入植後に、モンゴル人は漢人式の集約的な農法を受け入れた。東部地域では換金作物のトウモロコシを栽培し、その茎を家畜の飼料として利用している。東部地域のモンゴル人にとって農業は二重的な意味を持つことが明らかになった。すなわち現金収入を得る手段でありながら、

牧畜業を支えることができる。本論では、こうした農業と牧畜業を相互依存させた半農半牧的生業構成の実態を明らかにした。また牧畜業は衣食住を支える生業経済ではなくなり、現金を得る手段になった。従来のモンゴルの牧畜システムは群れの半数以上が去勢オスからなる「去勢オス維持型」牧畜であった。これらの去勢オスは役畜と軍事力の源泉であった。しかし、今日の東部地域のモンゴル人の牧畜経営は現金収入を得るためであり、「資本」となるメス畜を手元に残すようになった。そして、本論では東部地域のモンゴル人の牧畜業の構造的転換、「メス維持型」へ転換した実態を明らかにした。

こうした生業構成の変化に加えて、中国政府が実施した土地の分配政策により、東部地域のモンゴル人の土地利用のあり方と土地認識が大きく変容した。すなわち土地の使用権は個人に所有されたことで、土地の賃貸システムが定着し、「土地＝富」という認識が生まれた。このような土地認識の変化はモンゴル人社会内部から生まれたものではなく、生業転換と国家政策によるものである。定住、農耕化に合わせて東部地域のモンゴル人の年中行事も再編された。本論では遊牧モンゴル人の年中行事と比較分析を実施した結果、構造的な変化がなかった。しかし、清明節に墓参りする祖先儀礼が実施されるようになった。また通過儀礼には構造的な変化がなかったが、祝う形態の変化がみられた。

東部地域のモンゴル人は遊牧をやめ、農耕化したが、自己をモンゴル人と認識している。しかし、遊牧を営むモンゴル人と異なり、似たような生活を送る漢人農耕民とも異なることを意識している。彼らは、自らのことをモンゴル語で「ホヤル・イン・ホーロンド、ゴリバ・イン・ドンド（はざまに生きる人びと）」(*hoyar in hoorondo goriba in donda*) と呼ぶ。これは、遊牧モンゴル人と漢人のはざまに生きる人びとであることを意図したことわざである。東部地域のモンゴル人は農業と牧畜業を複合させた半農半牧的/ハイブリットのな生活様式を創出したのである。東部地域のモンゴル人は漢人入植による社会環境の変化に能動的に対応し、農業の生産方式を生活に取り入れた。しかし、他者たる漢人のモノをそのまま受け入れたではなく、選択的に自分の生活に取り入れた。そして遊牧文化をベースに新たな生活実践を創出した。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	包 双月
論文審査担当者	(主査) 教授 沼崎一郎 教授 木村敏明 教授 川口幸大 准教授 越智郁乃
論 文 名	定住・農耕モンゴル人に関する文化人類学的研究 — 内モンゴル自治区東部地域における生業転換と社会変容 —
<p>本論文は、中国内モンゴル自治区東部地域の定住モンゴル人村落を対象として、歴史研究の成果を駆使しつつ、2014年8月から2019年10月にかけて通算14ヶ月の集約的な人類学的フィールドワークを通して得られた民族誌的データに基づいて、定住農耕化したモンゴル人の生業形態を詳細に記述分析し、モンゴルと中国、遊牧と農耕の「はざま」に生きるモンゴル人の「ハイブリッド文化」とその特性を明らかにするものである。</p> <p>序論となる第1章では、人類学における遊牧民研究と歴史学・人類学におけるモンゴル研究の批判的な再考を通して、人間中心主義的・定住中心主義的な遊牧研究とそのモンゴルへの適用の問題点が析出され、自身が内モンゴル東部地域の定住モンゴル人であるというネイティブ人類学者として、自身の周辺性に立脚しつつ、遊牧研究とモンゴル研究の再検討を目指すことが宣言される。</p> <p>第2章では、研究対象となる中国内モンゴル自治区東部地域が、モンゴル世界／遊牧世界の周辺であると同時に中華世界／農耕世界の周辺でもあるという意味で、二重に周辺の地域だと位置付けられる。第3章では、定住農耕モンゴル人の最大の特徴であるブタの飼育と利用の実態が詳細に記述され、そこには漢文化からの借用のみならず、モンゴル文化に伝統的な家畜利用の理念と実践の適用も見られることが明らかにされる。第4章では、農耕化の顕著な二つの定住村落における農耕の実態が詳細に記述され、ナムク・タリヤと呼ばれる遊牧と組み合わせて実践されてきたモンゴルの農耕も維持されていることが明らかにされる。第5章では、牧畜を専業としてきた村落での観察を中心に、定住牧畜の現代的実践が詳細に記述され、第6章では土地所有形態の歴史的変化、第7章では社会構造と儀礼の変化が記述されて、定住農耕化と定住牧畜化に伴って、社会構造の基本が人間的紐帯から地縁的紐帯へ、そして儀礼の担い手も地縁的關係へと変化している現状が明らかにされる。第8章では、以上の知見に基づいて、未完成ではあるが、人間中心主義と定住中心主義を脱した、周辺のハイブリッド文化からの遊牧論が構想され、その独自性と将来性は高く評価できるものである。</p> <p>モンゴル研究と人類学に対する民族誌的および理論的貢献は大であり、本論文の提出者は博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	